Kyushu University
Advanced Asian Archaeological Research Center
QARC NEWSLETTER No. 8 2016. Feb.
九州大学アジア埋蔵文化財研究センター　ニュースレター

福岡県桂川町・天神山古墳の発掘調査

文化財調査法開発部門
人文科学研究院　辻田淳一郎

九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室では、平成23年度から約5年間にわたり、遠賀川上流域の嘉穂地域において、前方後円墳の測量・発掘調査を実施してきました。特に、嘉穂郡桂川町の金比羅山古墳について、科学研究費基盤研究（B）を受けて発掘調査を実施した結果、金比羅山古墳が遠賀川上流域でも最古級で、流域最大の王塚古墳に次ぐ80m規模の前方後円墳であることが明らかになりました。またこの科学研究費では、九州大学に保管されている、飯塚市山の神古墳の出土遺物の整理・報告作業を併行して行いました。山の神古墳は5世紀後葉の「雄略朝」期に築造された80mの前方後円墳で、金銅装の馬具をはじめとする豊富な副葬品の内容から、対半島交渉に従事しながら近畿中央政権との深いつながりを持った塘地域の被葬者像が描き出されました。これらの成果は報告書として刊行され、リポジトリ上で閲覧可能となっていますので、御参照いただけましたら幸いです。

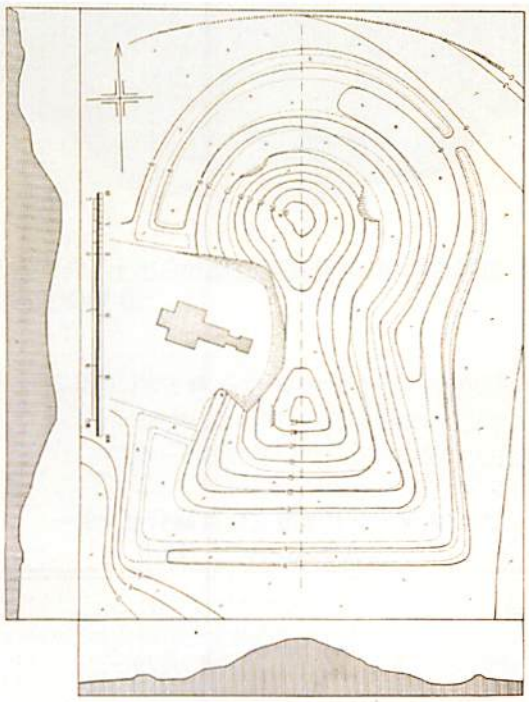

図. 桂川天神山古墳測量図（京大報告）.

これらの調査成果に続いて、現在桂川町教育委員会を調査主体として新たに調査が行われているのが、嘉穂郡桂川町に所在する天神山古墳です。桂川町周辺は7基の前方後円墳が集中する地域ですが、そのうちの1基として、全長約68mの天神山古墳があります。天神山古墳は、京都大学による王塚古墳の調査報告書（1940）に、墳丘測量図が掲載されていますが、その後詳細な調査が行われていませんでした。神社の境内であり、社殿の築造にあたって墳丘の一部が削平されていますが、現在まで埋葬施設が発見されたといった報告はなく、主体部の位置については不明です。この古墳は、墳丘形態や築造技術の特徴から、6世紀前葉の王塚古墳に次ぐ6世紀中葉～後葉に築造された可能性が想定されてきました。その時期は、「磐井の乱」の後に、この地域に「鎌屯倉」と呼ばれる中央政権の政治的・軍事的拠点が設置された頃と重なります。その意味で、天神山古墳の調査成果は、遠賀川上流域の地域社会の問題にとどまらず、日本列島の6世紀史、ひいては東アジアの6・7世紀史に大きく関わるものとなる可能性があります。現在新たな測量図の作成と、範囲確認の発掘調査が始められたところで、平成28年度以降、引き続き調査に参加させていただく予定です。調査の成果をまた様々な形でお伝えできればと考えております。

写真. 天神山古墳・調査風景.

大内氏歷史文化研究会で周防大内氏を学際的に研究する

歷史情報研究部門
比較社会文化研究院　伊藤幸司

14世紀後半～16世紀中葉にかけて周防山口を本拠としつつ、中国地方西部から北部九州地方という広大な地域を支配したのが大内氏という地域権力である。大内氏は、関門海峡という国内流通の要衝を押さえ、さらに中世日本最大の国際貿易港博多をも直轄支配していた。中央で勃発する政変にもたびたび登場し、その影響力は京都の室町幕府や朝廷にも及ぶ。大内氏の特徴は、室町幕府にも比肩するほどの外交活動を積極的におこなっていたことである。14世紀末期に開始された高麗・朝鮮通交を皮切りに、15世紀中葉には明や琉球との関係も形成した。16世紀中葉の滅亡直前には、日本にキリスト教をもたらしたザビエルが、並び立つ地域権力のなかから大内氏を選択して山口にやって来た。こうした外交活動によって、大内氏の支配領域には、首都である京都に先立って大量の唐物が流布し、大陸文化の影響が現れた。

こうした大内氏のありようは、12～16世紀の日本列島と東アジア諸地域との交流史を勉強する私にとって、絶好の研究素材となっている。私の大内氏研究は、おもに古文書や古記録、禅僧の語録といった文献史料にもとづいているが、大内氏の魅力は考古学、文学、美術史学などにわたる多彩な史料が残されていることである。とりわけ、山口市では大内氏関連町並遺跡の発掘成果が一定程度蓄積されており、その成果と文献史学の融合が求められている。こうした学際的研究をおこなう場として、10年前に誕生したのが大内氏歷史文化研究会である。研究会には、歷史学・考古学・文学・美術史学の研究者が集まり、年に数回の研究報告会を開催し、その成果を市民講座や公開講演の場を通して地域へ還元している。時には地域の寺社へ赴き、所蔵史料の調査もおこなっている。ちなみに、私はこの研究会の会長を創設以来、ずっとやっている。

大内氏歷史文化研究会の成果として私が発表した論文の一つに、拙稿「中世西国諸氏の系譜認識」（九州史学研究会編『境界のアイデンティティ』岩田書院、2008年）がある。論文執筆のきっかけとなったのは、大内氏の菩提寺乗福寺跡地（山口市）から四爪龍の滴水瓦が出土したことにある。考古学の知見は、14世紀後半に朝鮮半島の瓦工が来日し、山口で王宮に飾るような朝鮮風の瓦を作成したとのことであった。この成果を文献史料と突き合わせると、大内義弘が活発な朝鮮通交を開始した時期と見事に合致しており、義弘が乗福寺を朝鮮風のデザインで荘厳化していたことがわかった。この事実は、大内氏が朝鮮半島との関係の深さを日本国内で目に見える形でアピールしていたことを示している。なぜそのようなことをする必要があったのであろうか。私は、新興勢力として当該期の朝鮮通交へ参入しつつあった室町幕府の足利義満の存在を義弘が意識した結果、みずからの優位性を先行して日本国内で強調する意味合いがあったのはなかろうかと考えている。

写真. 乗福寺跡第5次発掘調査地から出土した滴水瓦.
（伊藤幸司撮影）

【センター活動報告】

2015年12月25日　アジア埋蔵文化財研究センター第8回研究会

講演題目1：「モンゴル国ヒャウル・ヒャラーチ遺跡の発掘調査」
講演者1：宮本一夫（人文科学研究院）

講演題目２：「高精度元素・同位体分析を用いた土井ヶ浜遺跡の弥生時代の人口移動・通婚圏の研究－速報－」
講演者2：高椋浩史（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）・足立達朗（アジア埋蔵文化財研究センター）・中野伸彦（比較社会文化研究院）・田尻義了（アジア埋蔵文化財研究センター）・小山内康人（比較社会文化研究院）

2016年1月30日　ワークショップ「今日、考古学に何ができるか」を開催（九州大学Progress100プログラムと共催）
場所：九州大学伊都ゲストハウス多目的ホール

九州大学アジア埋蔵文化財研究センター
ニュースレター　No. 8

発　行：〒819-0395　福岡市西区元岡744
九州大学アジア埋蔵文化財研究センター
編集：足立 達朗　発行日：2016年2月29日
TEL：092-802-5661/FAX：092-802-5662
E-mail：qa3rc@scs.kyushu-u.ac.jp
ホームページ　http://scs.kyushu-u.ac.jp/qa3rc/